

未知の山域へ 学生部ブータンヒマラヤ登攀記

早稲田大学山岳部主将・蛭田弥希



A Cから見た5725m峰 手前の稜線が北稜

学生部ではおよそ隔週のペースで集会を持っている。近年の大学山岳部の部員不足は深刻な問題であり、同じ悩みを抱える私たちの足は自然と学生部の集会へと向かっていったようだ。また、皆それぞれがクラブ内に同期の部員がいないということも手伝って、私たちはほとんど集会が

一九九八年十月、日本山岳会学生部では魅力的な未踏峰を数多く残す秘境・ブータンヒマラヤの未踏の無名峰(標高五七二五メートル)への登山を行いました。それぞれ異なった七つの大学から一人ずつが参加するという異色のメンバー構成で挑んだ未踏峰。標高もスケールもそれほど大きいものではありませんでしたが、ルートは思いのほか厳しく、緊張感のある充実した登山をすることができました。

あることに集まっては話し込んでいた。そして、大学は違っても同期同士、皆どこか海外の山へ行こうという話が持ち上がったのである。その後文部省登山研修所で知り合った仲間たちも合流して、七大学七名、しかも全員が主将という異色パーティーが結成されたのである。

二、ブータンヒマラヤへの道

次に、どの山へ行くかを決めるに当たって、私たちが打ち立てたコンセプトは「学生だけで未踏峰へ挑戦する」であった。なぜ未踏峰かというと、未だ誰も見たこともないような地域に足を踏み入れ、山をつぶさに観察し、ルートを決めて挑戦する。それこそが登山の本来の姿であり、私たちの理想とする登山であると考えたからである。

きっかけは、日本山岳会内で中村保氏の「ヒマラヤの東 中国四川・雲



1999 年 (平成 11 年)
2 月号 (No.645)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

未知の山域へ	1
崗嘎普松峰偵察	5
JACネパールトレッキング	
ジョムソン・ハイキング	6
シバプリ植林体験	7
アンナプルナ・ダウラギリ展望	8
親善レセプション	9
ボカラ国際山岳博物館	9
海外の山	10
報告	
指導委・大学山岳部監督会議	11
科学委・中高年登山	12
百年史委・会員名簿探し	13
三水会・高尾山	13
支部だより	
岩手支部・真昼岳	14
岐阜支部・雨乞岳	14
わが支部とっておきの一山	
越後支部・蒜場山	15
岐阜支部・笠ヶ岳	16
福島支部・二ツ箭山	17
東西南北	
水雲山三ツ峠大権現	18
俳句・三水会雪嶽山山行	19
俳句・泣面山	19
幻の古代杉を尋ねて	19
短歌・部子山のスケッチ	20
新入会員・図書受入報告	21
会務報告	22
INFORMATION・ルーム日誌	23

▶日本山岳会事務取扱時間

月・火・木	10~20時
水・金	13~20時
第2、第4土曜日	閉室
第1、第3、第5土曜日	10~18時
▶図書室開室時間	
ルーム開室日(月曜日を除く)	13~20時

南省の未踏の山々」についての勉強会に参加させていただいたことである。世界にはこのような未知の領域が残されているのか、と目から鱗が落ちるような刺激を受け、さっそく未踏峰に関する勉強を開始した。

当初は四川・雲南の山々(横断山脈)の未踏峰を中心に計画を立てていたが、登山許可や予算の関係で折

り合いがつかず、行き詰まりを感じていたところに浮かんできたのがブータンヒマラヤであった。

基本的にブータンヒマラヤは登山禁止ということになっているが、打診してみたところ、チベットとの国境から離れていて標高も六〇〇〇メートルに満たない山であれば、特別にトレッキングピークとして認める

というものであった。最も大きな問題は、ブータンではただ滞在するだけで一人につき一日二〇〇USドルという非常に高額な滞在費を取られるというところであったが、山岳会の会員の皆さまからの多大なご支援により何とかその問題も解決した。

トル)に登った千葉大隊が撮ってきた写真、旧ソ連軍による二十万分の一の地図、数少ないブータンヒマラヤに関する古い文献を頼りに、私たちの計画は進んでいった。

未踏峰は非常に魅力的だが、準備・渉外の段階で多大な労力を必要とした。今回の登山を通して一番大変だったのが、この準備活動であったとさえ思う。しかし、それも私たちにとってとてもよい経験になった。あらかじめ用意されたマニュアルに頼るというのではなく、登山を本当に一から組み立てていくという作業は、大変ではあったが非常に充実したものであった。

三、出発・キャラバン

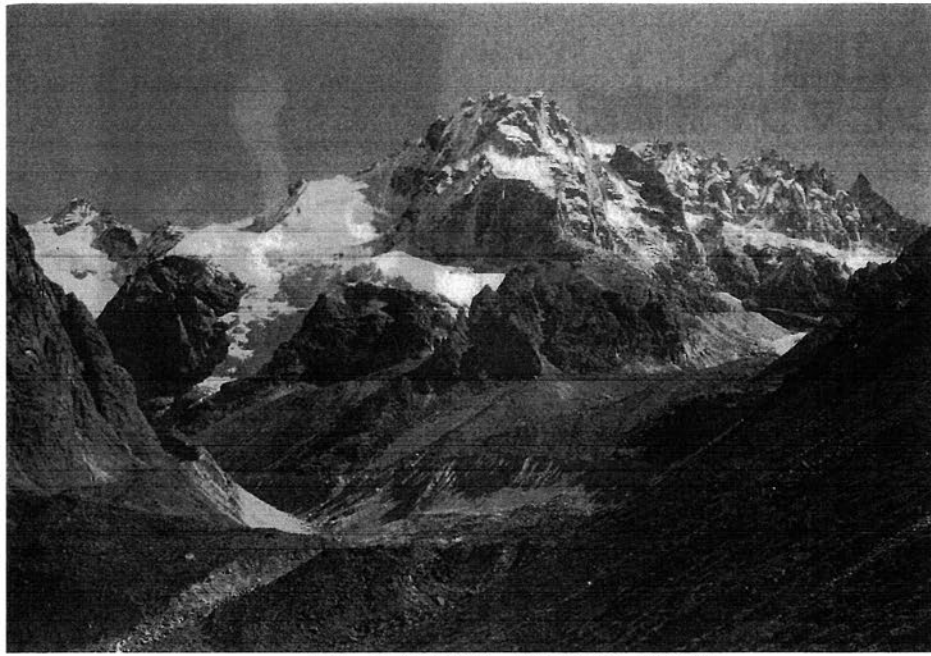
ブータンへはバンコク、カルカッタを経由して入国する。のどかな石置き屋根の空港ターミナルビル(?)で「ゴ」という独特の民族衣装に出迎えられると、ついにここまで来たかという実感が湧いてくる。空港があるパロから首都ティンブーへは車で二時間ほど。首都とはいえ、人口は六万人足らずで、水田の風景から人の顔かたちまで「古きよき日本」といった印象であり、外国に来るのは初めてという者が多い中で、舞い上がるどころか妙に落ち着いてしまう。ホテルでキャラバンのための梱包作業や現地スタッフとの打ち合わせを済ませ、いよいよスタートである。

キャラバンはティンブーから三〇〇メートルの峠を越えて再び谷間へ下った、標高一七〇〇メートルのタシタンという村から始まる。二七五〇メートルのティンブーが涼しくて過ごしやすかった一方、ここは標高が低いこともあってとても暑く、道端にはサボテンや果樹も見られるという不思議な変化であった。

そのような熱帯的な場所から歩きはじめるので、これからヒマラヤ登山へ行くという実感がなかなか湧いてこない。しかし、一日につき七、八時間歩くペースで徐々に標高を上げていくと、一日ごとに植生も変化を見せ、遠くには屏風のようなヒマラヤの山々が望まれてくる。モーチューという大きな美しい峡谷に沿ってつけられた危うい道を、荷物を背負った馬たちとともにたどっていく。途中高度順応のために、竹で編んだ独特の帽子をかぶる民族が住むラヤという村を訪れたり、登山以外のところでも興味を引く面白い体験ができた。

四、登山活動

ベースキャンプとなるロドフ(約四〇〇〇メートル)という場所へは一週間ほどのキャラバンで着いた。そこは谷が広がった交易の際の休



5725m峰(B Cから) 左のスカイラインが北稜

というものであった。最も大きな問題は、ブータンではただ滞在するだけで一人につき一日二〇〇USドルという非常に高額な滞在費を取られるというところであったが、山岳会の会員の皆さまからの多大なご支援により何とかその問題も解決した。

以前にブータンの山(ツェンダカン峰、六五〇〇メー

トル)に登った千葉大隊が撮ってきた写真、旧ソ連軍による二十万分の一の地図、数少ないブータンヒマラヤに関する古い文献を頼りに、私たちの計画は進んでいった。

未踏峰は非常に魅力的だが、準備・渉外の段階で多大な労力を必要とした。今回の登山を通して一番大変だったのが、この準備活動であったとさえ思う。しかし、それも私たちにとってとてもよい経験になった。あらかじめ用意されたマニュアルに頼るというのではなく、登山を本当に一から組み立てていくという作業は、大変ではあったが非常に充実したものであった。

三、出発・キャラバン

ブータンへはバンコク、カルカッタを経由して入国する。のどかな石置き屋根の空港ターミナルビル(?)で「ゴ」という独特の民族衣装に出迎えられると、ついにここまで来たかという実感が湧いてくる。空港があるパロから首都ティンブーへは車で二時間ほど。首都とはいえ、人口は六万人足らずで、水田の風景から人の顔かたちまで「古きよき日本」といった印象であり、外国に来るのは初めてという者が多い中で、舞い上がるどころか妙に落ち着いてしまう。ホテルでキャラバンのための梱包作業や現地スタッフとの打ち合わせを済ませ、いよいよスタートである。

キャラバンはティンブーから三〇〇メートルの峠を越えて再び谷間へ下った、標高一七〇〇メートルのタシタンという村から始まる。二七五〇メートルのティンブーが涼しくて過ごしやすかった一方、ここは標高が低いこともあってとても暑く、道端にはサボテンや果樹も見られるという不思議な変化であった。

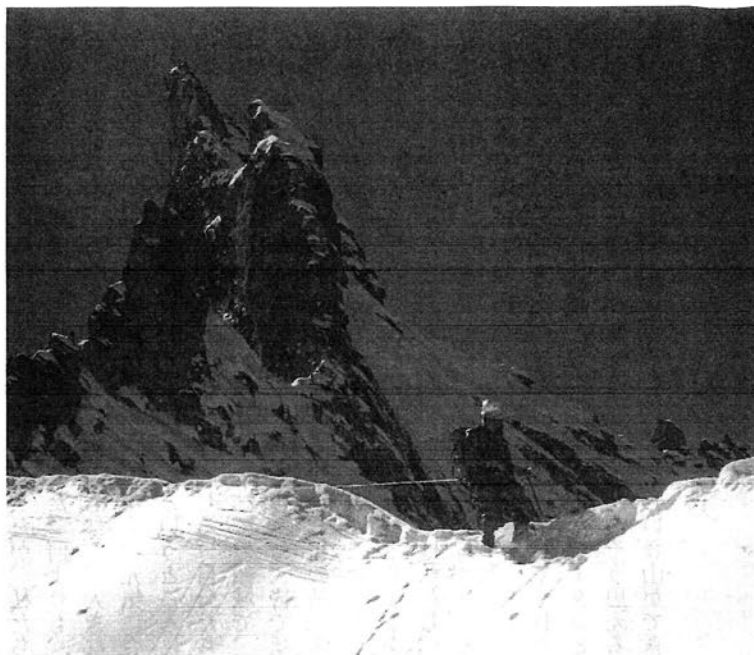
そのような熱帯的な場所から歩きはじめるので、これからヒマラヤ登山へ行くという実感がなかなか湧いてこない。しかし、一日につき七、八時間歩くペースで徐々に標高を上げていくと、一日ごとに植生も変化を見せ、遠くには屏風のようなヒマラヤの山々が望まれてくる。モーチューという大きな美しい峡谷に沿ってつけられた危うい道を、荷物を背負った馬たちとともにたどっていく。途中高度順応のために、竹で編んだ独特の帽子をかぶる民族が住むラヤという村を訪れたり、登山以外のところでも興味を引く面白い体験ができた。

四、登山活動

ベースキャンプとなるロドフ(約四〇〇〇メートル)という場所へは一週間ほどのキャラバンで着いた。そこは谷が広がった交易の際の休

憩地であり、私たちの目標である五七二五メートル峰を目の前にしている。また背後にはチョモラリが大きく聳え、ベースとしてはこの上ない素晴らしい場所であった。

私たちは双眼鏡を携えて各方面から偵察を重ね、皆で話し合った結果、北側にルートをとることに決定し、五七二五峰の北側にABC(四七五〇メートル)を作り、登山活動に入った。ABCは五七二五メートル峰の懷の中、氷河の舌端近くの草地に作った。もう標高は五〇〇メートルに近いというのに、辺りには背の低



頂上直下の岩峰(真ん中) 基部で敗退

いシャクナゲが生え、高山植物が咲き乱れる桃源郷のような場所であった。目の前には千葉大隊が登ったツェンダカン峰が大きく望まれた。

ABCからは悪いガレ場をつめてツェンダカンの東峰から来る氷河に乗り、五七二五峰を北

から大きく回り込む形で、北側の稜線(北稜)に取りつくことにした。氷河はクレパスの迷路で、右へ左へクレパスを避けながら手探りでルートを進めていく。そして氷河の最上部、北稜への取りつきのところにACを設置し、荷揚げを開始した。

ACから見る五七二五峰はBCからの印象とは異なり、かなり厳しい表情を見せていた。BCからは裏側となつて見えず、私たちがかすかな期待を抱いていた五七二五峰の東側が絶望的に切れ落ちていたからである。ルートとなる北稜も、細い雪稜

に脆い岩峰をいくつも乗せた非常に困難な様相であった。

しかし、一見無理そうに見えても意外と弱点はあるもので、岩峰を右へ左へよけながら、ルートは順調に延びていく。雪壁、ナイフリッジ、脆く悪い岩稜、ミックス……と変化に富んだルートで、ルート工作も楽しい作業であった。何よりも、そこは未だ誰も足を踏み入れたことがない場所であり、自分が実際に目で見るとさえない岩にハーケンを打つという喜びが私たちを支配して止まなかった。

そして、用意した七〇〇メートルのフィックスロープを使いいきなりながらも、何とかアタックの体勢を取ることができるところまで漕ぎつけた。第一次アタックには、隊員の中でも登攀能力の高い宗像と栗谷川の、副隊長二名が選ばれた。午前二時に起きて、まだ暗い星空の下、彼らは四時に出発していった。体調もよいようで、ようやく陽が射してくる頃には、既にフィックスの終了点に到着していた。天気も最高だ。遠くにはチョモラリが静かに私たちを見守っている。

そこから先のルートは細いミックスの岩稜帯があり、さらにその上には今回の核心部とも思われる頂上直

下の大岩峰が空高く聳えている、非常に厳しいルートだ。留守番隊員は不安と期待を抱きながら、双眼鏡で彼らの動きを追っている。開けっ放しのトランシーバーからは、「あとロープはいくつある?」「あと五! 五メートル!」と、苦しそうではあるが頼もしい声が途切れ途切れに入ってくる。

彼らはゆっくりと、しかし着実にルートを延ばし、最初の岩稜帯を突破した。そして、岩峰をまた一つ越えたようだ。残るは頂上直下の大岩峰だけだ。双眼鏡を握る手にも思わ

ず力が入る。

……と、彼らは大岩峰の基部で動

チベット高原上空からヒマラヤを越えカトマンズへ
(名古屋発着・中国経由便)

ヒマラヤ
越えフライト
(第5回)

5/1(土)から5/9(日)まで

ヒマラヤ越えが魅力の特別運行便
ボーイング757、機窓からの大パノラマ



運輸大臣登録一般旅行業490号/日本旅行業協会正会員

ALJAPAN TRAVEL SERVICE 株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06(6444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557



7大学から集まったメンバー

かなくなった。遠くてよく見えないが、何か話して合っているようだ。どこから取りついてどう登る気なのかはたまたもうそこから先は登れないのか。待つ身としては辛い、空白の時間が流れる。

そして、ついにトランシーバーを通してアタック隊から「ここから先は無理」との報告が入った。体から力が抜けていくと同時に、悔しいという思いと充実感を伴った安心感が私を包んだ。

私たちの登山はこれで終わった。終り方は、これまでこの山に登るためにかけてきた多大な時間と労力に比して、あまりにもあっけないものだった。そして、頂上に立つことは

できなかった。だが、頂上に登れる登れないというよりも、この登山がもう終わってしまうということを自分に納得させるのに時間がかかった。それだけこの登山が自分にとって充実した楽しいものであり、最初は自覚に乏しい鳥合の衆に過ぎなかった私たちが、一から計画を作り、登山を組み立ててこの遠いブータンヒマラヤにやってきて、あの頂上直下の大岩峰の基部まで到達したということに満足感を得た。

五、終りに

五七二五峰への登頂こそかなわなかったが、私たちの登山は無事終わった。何よりも、誰一人怪我することもなく、大きな病気にかかることもなく、元気に登山活動に参加できたというところにこの登山の意義を感じる。自分たちが目で見えた情報がすべての領域で、双眼鏡を片手に偵察を重ね、皆で話し合ってルートを決め、目の前の雪原に未だ誰も踏み入れたことのない一步を踏み出し、手探りでルートを延ばしていく。この喜びは私たちにとって忘れ得ないものであった。大変だった準備・渉外活動が、その一步一步の重みをさらに増してくれたように思う。

またブータンヒマラヤへきたい。心からそう思えるような、充実した楽しい登山ができたと思う。

*

この登山は私たち学生だけでは到底実現できないものでした。学生部担当理事として何度もつぶれそうになった私たちの登山を力強くバックアップ

7、行動等の概要

1997年
5月 計画持ち上がる 以後地域研究
1998年
4月 ブータンヒマラヤに対象決定 渉外活動開始
7月 準備作業開始
10月 3日 成田発
4日 バンコク経由ティンブー着
6～11日 往路キャラバン
12日 ロドフBC建設
13～27日 登山活動
28～29日 カラカチュ・ラ方面偵察
10月30日～11月2日 帰路キャラバン
11月3～4日 ティンブー滞在
5日 ティンブー発
7日 カルカッタ経由成田着

め活動を行っていきたいと思います。温かいご理解と多大なるご援助をありがとうございました。そして、これからも学生部をよろしく願います。

六、隊の構成

隊長

蛭田 弥希 (早稲田大学山岳部)

副隊長

宗像 充 (一橋大学山岳部)

栗谷川勝行 (法政大学山岳部)

隊員

榎並 祐史 (慶応大学山岳部)

山梨 善広 (東海大学湘南校舎山岳部)

小林象士郎 (駒澤大学山岳部)

長岡 正敏 (関西学院大学山岳部)

顧問

吉永 英明 (学生部指導委員)

近年、活動が沈滞していた学生部ですが、この登山を契機としてこれからさらに活性化していきたいと思えます。部員不足で一つの大学だけではなかなかできないことでも、このように一大学の枠を超えて連合していけばできることもある。学生部はその連合を推進できる環境と土壌を持っています。これから先も学生部を中心とした大学間の連携を強

崗嘎普松峰偵察

偵察隊隊長 伊丹紹泰



崗嘎普松(ガンカー・プンスム)左と良崗康日(リャンカン・カンリ)写真提供/読売新聞社

高所登山研究委員会の担当理事に就任後、同委の存在意義、目的などに関して、委員間で議論をしてきた。同委が発足以来、目的としてきた高所登山研究などが一定の成果を得、その後の委員会活動が(その是非は別として)研究から登山の実践へと変化してきた。委員数が制限され、比較的若い委員によって同委が構成されたこととあいまって高所登山の継続的実践の路線が踏襲されたことは、自然の流れであった。

「未知、未踏。より高き、より困難」

を標榜しながらも現実的な目標、具体的にはカメット、ガネツシュ、及びガンカー・プンスムの中国側未登ルート(を想定して、あらゆる機会をとらえて、中国登山協会、西藏登山協会と接触を図っていた。幸運にも未踏峰崗嘎普松(ガンカー・プンスム 七五七〇メートル)の登山許可を取得し、機が熟した昨秋、理事会の承認を得て、伊丹を隊長として、中村進、山本篤の三名からなる偵察隊を派遣することに決定した。その他のメンバーとして、読売新聞社か

ら井原敦、宮坂永史の両氏、さらに通訳として、四川大学(成都)留学中の佐藤大輔君が参加した。

十月十四日、全日空九〇五便で北京入り。十七日、快晴の拉薩(ラサ)に到着。十九日の晩はチベット自治区副主席ツェリン・ドガ先生、翌二十日は西藏登山協会首席ローサン・ダワ先生主催の夕食会に招待され、偵察が成功するよう激励を受ける。

十月二十一日、午前八時五十分、三台のジープに分乗し、拉薩を出発。午後二時三十分、チベット最高所の湖プマヨツォ(五一〇〇メートル)に着く。神秘的な湖の南方にクーラ・カンリを中心とするヒマラヤの大パノラマが展開していた。その西端の奥に霞むように屹立する白い山があり、それがガンカー・プンスムであった。その後、モンダ・ラを越え、午後五時、自動車道路の終点となった最奥の村ヨジツォンツォ(四五〇〇メートル)に到着。村の西の外れにキャンプした。調査と情報収集に三日間を費やす。

十月二十五日、三十頭の馬を利用して隊荷とともにBC入り。ローザ川の上流、かつてプータンとの交易が行われたス McD と呼ばれるリャンカン氷河の舌端(四七五〇メートル)にBCを設営した。ルートの偵察は、より可能性の高い北面に通じるナム

サン氷河から着手した。二十六日、山本篤登攀隊長を中心にナムサン氷河に入り、左岸に歩きやすいルートを見出す。この時ナムサン氷河に見事な氷塔群を見る。その後、五四〇メートルにC1を設営し氷塔群を抜け、アイスフォール直下五七五〇メートルまで偵察を行った。

さらに、リャンカン氷河からリャンカン西面の登路を探り、山本は初めてガンカー・プンスムの頂稜部分を見た。だが、西面側のルートは絶望的であった。この結果、ガンカー・プンスムへの登頂ルートはナムサン氷河のアイスフォールを突破して行くか、リャンカン・カンリの北の主稜線を経由して頂上に至るか、二つの選択肢が残った。

十一月七日、ガンカー・プンスムの全容を観るため、BCを撤収してクーラ・カンリ南面にある海拔四二五〇メートルの魚若村に移動した。三日間ガンカー・プンスムの姿を探し回った結果、四日目の十一日、五三〇〇メートルの山稜から遂にガンカー・プンスムの全容を望むことができた。

十一月十二日、拉薩に戻り、二日間、隊荷の整理を行う。十六日、北京で偵察の清算を中国登山協会と行い、十七日の全日空九〇六便にて帰国した。

JACネパールトレッキング



1998年は「ネパール観光年」であったため、日本山岳会はネパールへの感謝の意を込めて、

以前から会員の要望が強かった「ネパールトレッキング」を企画。

チャーター便を利用して、11月20日～28日の日程で実施しました。

全国各支部から124名の方が参加され、エベレスト方面、アンナプルナ方面、ランタン方面など7コースに分かれてヒマラヤトレッキングを楽しみました。連日の好天に恵まれ、事故もなく終了しました。

帰途、機上の参加者によるアンケートでは、

ほとんどの方から「今後も継続してほしい」とのご要望をいただきました。(実行委員会・吉永英明)

秘境ムスタンへの道 ジヨムソン・ハイキング

リーダー・小倉童子

十二月二十二日、ポカラ空港から八千メートル峰のアンナプルナ山群とダウラギリ山群の間を縫っての豪勢なフライトに、歓声を上げていたのもつかの間、荒涼たるジヨムソン空港（二七二三メートル）へ無事着地する。さすがに風は冷たく寒い。

間近にニルギリ北峰（七〇六一メートル）の水壁が、雲一つない青空にそそり立つ。勞せずして秘境に踏み入った幸せに酔いしれたものの、後ろめたさも残る。頂に目を凝らすと雪煙が北へ真横に吹き荒れていた。

メンバー十七名、ツアーコンダクター・深井、サード・パサンを含めた総勢十九名は、先発十五名、後発四名と二班に分かれてのフライトになった。後発の到着を空港前ロτζで待ったが、予定の時刻を過ぎてもエンジン音はなかった。パサンが困惑した様子で、リーダーの私に「ニルギリの頂の雪煙見ましたか。今日は飛べないかもしれません」と告げた。今日中に合流は無理と腹を括る。その後のパサンの行動は見事だった。

宿泊地のロτζ、トレッカー・インに移動、各自割り当てられた部屋に落ち着く。

松田会員からあずかってきたMDSA（ネパールムスタン地域協力会）の近藤亨先生への贈り物と協力依頼の手紙を渡したいと、事務所はどこか聞いたところ、間もなくスタッフの白江さんが尋ねてきて「先生は学校建設の打ち合わせのため留守だが、私が実証農場を案内します」と申し出てくれた。午後、私たちは足慣らしを兼ねて、その努力の賜物を案内していただくことにした。日本人スタッフの熱意に驚嘆。

十一月二十三日、一番機で無事後発隊到着、再会を喜ぶ。「飛行機に乗り、アメまで渡されたのに、今日は飛べない」ですって……。T夫人の明るい声に、深井さんの対処のよさを感謝した。

準備の整った私たちは、予定の南コースへ出発する。ツクチェピーク、ダウラギリを眺めながらチベット風のマルファ村へ。後発隊と合流、わがファミリー全員集合だ。絵を描く人、写真を撮る人、のんびりしすぎってしまった。今夜は六時に、MDSAの白江さんたちから、全員夕食のご招待を受けていたのだ。

ロτζ前の事務所に同う。テーブルの上には、養殖に成功した紅鯉の

刺し身、農場で収穫した野菜や鶏肉、卵の煮物、野菜の天ぷら、一日がかりで作った豆腐とおからなどが並んでいた。その心尽くしに感涙し、スタッフ四人の明るい笑顔とともに、忘れ得ぬジョムソンの一夜となった。十一月二十四日、快晴。体調を崩したA夫妻はロッジで休養。メンバー十五名は、ムスタンへの道を北上チベット風城郭都市カクベニへ向かう。膝に故障のあるI・Tさんは、一時間半ほど歩いたところで、自力で引き返したいと申し出た。すべての条件を考慮して受け入れる。I・Kさんが、ちょっとした坂道で息苦しそうなのが気がかりだった。奈良原、大庭サブリーダーに、元氣組を任せ先行してもらうことにする。目的地カクベニに全員到着したのは昼過ぎだった。

元氣者のUさんが、風邪を引いたようだという。昼食に時間がかかり、帰路についたのが午後二時過ぎとなった。しかも、ムスタンの強風の予兆さえあった。二人のサブリーダーに、速く歩けそうなメンバーとUさんを頼む。ビスタリ組五名は、ゆっくりその後を追った。I・Kさんの歩みは遅く、足元もおぼつかない。がんばり屋さんだけに、不安がよぎる。その時、大庭サブリーダーが急ぎ足で戻ってきた。先発組は日没前

にジョムソンの村外れにたどり着いたという。それを見届け、戻ってきたのだった。

広い河原いっばいに砂塵が舞い上がり、竜巻を起こしながら、行く手を阻むかのように見えたが、幸いにも、どんどん遠ざかっていってくれた。広い河原を抜けたあたりで、山の肩に太陽が姿を消し、やがて暗闇の世界となった。ジョムソン村の頼りなげな灯りが見えた時は、胸をなで下ろした。ロッジ全員到着は午後六時三十分だった。

最高年齢七十五歳、平均年齢六十三歳。今回のコースの中で、標高差も少なく、一番楽なコースということで人気が集まったようだが、短時間で環境の変化の激しいヒマラヤに入ったため対応できなかった人、疲労の蓄積とあいまって、飲食物の変化や冷えなどによる腹痛と下痢、風邪による高熱と咳、膝などの古傷の痛み、持病に対しての認識不足など、中高年故の問題点が明らかになったようだ。メディカルチェックとトレニングの重要性を改めて考えさせられた山旅でもあった。

突然のリーダー指名に戸惑いもあったが、サブリーダー、メンバー、ツアーリーダー、サードに支えられて、無事帰国できたことをともに喜び合いたい。

シバプリ植林体験と 展望トレッキング

高橋 浩

ネパールに行ってみた、ヒマラヤの山頂に立てなくてもできるだけに近くに行ってみよう、これは日本登山歩きをしている者にとって憧れであった。もう一つ、ただ自分の勝手であつた。ネパールに行くのではなく「何かためになること」がしたいという気持ちもあった。そういうわけで、Jコースを選んだのである。

まず、シバプリにおけるラリグラス(日本名石楠花)の植林作業であるが、はじめの一日は、カトマンズの日本語学校の生徒三十人くらいと一緒に苗木を植木鉢に移植する作業であった。二十代の若い人たちとわいわいしゃべりながら、実に楽しい思いをした。次の半日は、植林場所であるネパールの人々たち(七十八人)の給水用溝掘りを手伝った。私にとっては植林体験であっても、これがネパールの山岳自然に役立つのだと思うとうれしい気持ちになった。

次に、カトマンズ盆地周辺のトレッキングであるが、シバプリの植林地からそのまま山頂(標高二七三二

メートル)に登り、カトマンズを中心に尾根づたいに約六〇度時計回りに行き、ナガルコット(一九八五メートル)に行き、そこから車で古都バダガオンを観光することであつた。

トレッキングでシェルパやポーターの世話になったのは五泊四日で、この間ずっと晴天に恵まれた。シバプリ山頂では、左側から真っ白なアンナプルナ、ガネッシュ、ランタンの山々、ドルジェラクパ、ガウリサンカールが続いており、興奮しながら山の形と名前を野帳に書き、写真を撮った。アンナプルナとガネッシュの間にマナスルと思える山が小さく白く光っていた。また、独特の山容の山を見つけた。ダウラギリだという人がいたが、私にはわからなかった。白く氷で固められた無数のヒマラヤの山々は、シバプリからナガルコットまでずっと右手に見え、展望トレッキングの醍醐味を味あわせてくれた。ナガルコットではエベレストが望めるということだったが、この天候では見えないとシェルパに言われてがっかりした。

トレッキングには日本語学校の副校長であるRAMESH氏が同行されたので言葉には困らなかったし、植生や昆虫などに詳しい池田明彦氏の説明があり、立派な「ネパールに

おける山の自然学現地講座」になった。シェルパは私たちの質問をよく理解し適切に返答してくれた。何せこの山歩きでは荷物をポーターに持ってもらうので身軽であり、野帳への記入やカメラ撮影が容易にできた。また、設営や食事の準備をしなくてすむので、テント場でメモを整理し、考える時間が十分にあった。

私たちが歩いたカトマンズ周辺の山地(二〇〇〇〜三〇〇〇メートル)は、ネパールにとっては日本の里山(五〇〇〜一〇〇〇メートル)と同じ感じではないかと思えた。里山は人間の手が入ってでき上がっているの、そのような考えで山の自然を観察した。ここでは、樹木の周りが二メートルもある高木が多く見られたが、これはカッスル(ネパール名)といい、葉は動物が食べ牛の飼料にするそうだ。同じように多く見られた高木にバーチ(ネパール名)がある。ともに広葉常緑で、ブナ科コナラ属の檜の仲間であるという(池田氏所見)。これらを観察しているうちに、その他に、ラリグラス、カリカット、ジョーラニ(日本名楠)などの広葉常緑高木があった。

ネパールの雨期はすごい高温多雨のためか、これらの高木にはおびただしい量の苔(器を洗う束子として用いる、名称は不明)がついており

異様であった。

チソパニ(二四〇三メートル)を過ぎると山の斜面に人の手が加えられ階段状になっている。そこには、ヒエ、アワ、ソバが見られ、また一部に茶が植えられていた。その他、気候、地質、動物についても観察したし、夜空の天の川は格別であった。トレッキングが終わりネパール最後の日、もう一度植林の現地に行つて、完成した様子を見た。われわれがトレッキングを楽しんでいる間にもシバブりに留まり植林作業をしていた仲間がいたので、その情熱に敬意を表するためでもあった。

以上のようにして、私の植林体験とトレッキングは終わったが、山の自然を観察するにはいつも疑問をもつてよく考え、学んだことは実際の活動につなげること、これが自然保護活動者養成のための現地講座である、私たちの講座の主宰者である大森弘一郎氏が厳しく言っておられるのを思い出した。私のしたことは、たとえその何万分の一であっても、今なんとなく充実した気持ちになっている。

このたびは、日本山岳会ネパールトレッキングに参加させていただき、また、第八十九回山の自然学現地講座として多くのことを教えていただいたことを改めて感謝します。

アンナプルナ・ダウラギリ 山岳展望トレッキング

阿部一孝

一九五〇年六月に人類が初めて八千メートルを超える山頂に立った。アンナプルナである。やがて日本でも刊行されたその果敢な記録は、敗戦で落ち込んでいた多くの日本人に勇気呼び起こした。

それから四十八年たった昨年、日本山岳会企画のトレッキング七コース中の標題の隊に、その山をぜひ一目見たいという人々が四十四名参加した。リーダーは会の常務理事・吉永英明さんで、三班に分かれて行動した。A班の行動、所見を中心に楽しかった記録をまとめたものである。行動山域はポカラ西北西約二〇キロの地点を中心とする約一〇キロの範囲で、標高は一〇〇〜三二〇〇メートルに及ぶ。チャンドラコットから順にビレンタンティに至る五個所のテント泊を重ね、一日の歩程は六〜十時間であった。展望図に示した他に、この視野内に現れるアンナプルナII峰七九三七メートル、同IV峰七五二五メートル、ガンガプルナ七四五五メートル、グレイシャドー

ム七一九三メートル、ティリツォー七三三四メートル、ニルギリ六九四〇メートルなどである。図の山の高さは視覚通りだが、横方向の寸法はツクチェピークとアンナプルナ間、ヒウンチュリとマチャブチャレ間を紙面の都合で縮小してある。

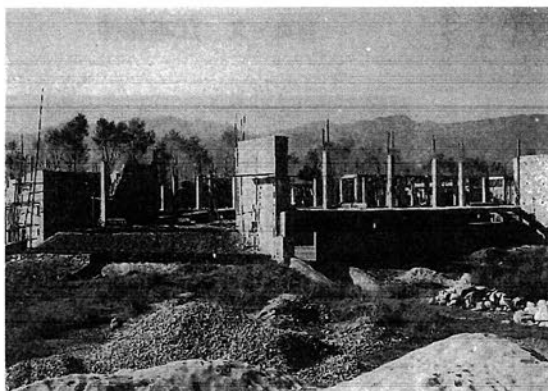


〈ブーンヒルからの展望〉

描いた山の高さは、標高比に距離の修正を加えたものである。

まずマチャブチャレ(魚の尾の意)の威容に感嘆し、進むにつれて順々に図の右方の山々から姿を現し、四日目のゴラパニ上方三〇〇メートルのブーンヒル頂上から全山が見渡せる。午前五時、懐中電灯を手にテントを飛び出し、薄氷の張りついた石段を踏んで登りついた山頂で迎えた十一月二十五日の御来光に輝くダウラ

建設中のポカラ国際山岳博物館 完成は2003年!!



ポカラ空港からタクシーで約10分、ダウラギリからマナスルまでの大眺望を楽しめる丘の一角にポカラ国際山岳博物館はある。写真のとおり現在建設中であり、一部開館は2年後。NMA事務局長のハドリ・バハドゥラ・ラヤマジャ氏は「建物はできても内容が問題であり、展示品などは、世界各国の協力を得て充実を図りたい。今後もぜひご支援を!」。完成は5年後の予定。

ギリ、アンナプルナ山系の大展望は、連日の労を忘れさせた。まさに白い神々の座である。

前出のアンナプルナ登頂フランス隊はこのヒルのすぐ西側カリガンダキに沿って北上し、今見えている背面から登頂に成功した。筋を引く雪煙にその労苦を思う。

トレッキングは大勢の人々の支援で成り立つ。朝テント場を出発してしばらく歩くと、やがて後方から賑やかな掛け声が聞こえて、ドコという円錐形の籠に食糧、燃料、食器、椅子テーブルまで、目いっぱい背負った一団が駆け抜けて行く。到着

すれば驚くほど日本的な料理が待っている。行き交うトレッカーの国籍は実に多様で、挨拶を交わしながらの登山は、まるで富士登山の国際版だとは、同行の福光正行ドクターの言である。最後のテント場では、支援してくれたネパールの人たちに感謝し、歌や踊りの交歓をした。遅くまで星空の下にレッサンピリリイ(絹の布は舞うよ)の歌声が流れていた。

終りに、初めてのグルーブをあれほど愉快地に、安全に統率されたわらわらサーブ、地下足袋登山家の吉永さんに一同の謝意を伝えたい。

日本・ネパール友好と 親善レセプション

神崎忠男

ネパールでは天候に恵まれ、それぞれのコースでヒマラヤトレッキングを十分に楽しむことができました。一九五六年のマナスル登山隊派遣を機に、ネパール観光局およびネパール山岳協会の支援、交流の中、数多くのヒマラヤ登山隊がネパールにお世話になってきました。日本山岳会(JAC)とネパール山岳協会(NMA)は登山界発展のパートナーとして四十数年の国際親善交流を培ってきました。登山がクラブとクラブを超えた国と国との友好親善を築いてきたといえましょう。

そして今回は百二十四名の会員がヒマラヤトレッキングのためネパールを訪れました。日ごろのヒマラヤ登山に対する協力を感謝の念をこめて、記念のレセプションを十一月二十六日、カトマンズのホテルヒマラヤンで開きました。

日本山岳会は過去、マナスル登山をはじめ、一九七〇年エベレスト登山隊、一九八八年の三國友好登山隊、マナスル登山四十周年記念トレッキ

ングなど、機会をとらえレセプションを開いてきました。エベレストが初登頂されてから半世紀、二十一世紀に向けて、山岳文化継承の起点を目指すポカラ国際山岳博物館建設への寄付金贈呈式を盛り込んだ、まさに果実を加えた意味の大きい国際親善交流レセプションとなりました。

ビムラム・クマール・カドカ殿下(元ネパール山岳協会会長、ハルカ・グルン国会議員、そして駐ネパール柳瀬友彦大使、日本山岳協会坂口三郎会長、八木原昭明国際部長、日本山岳会斎藤惇生会長以下多くの会員が出席されました。そして、民族舞踊の披露などヒマラヤトレッキングの締めくくりとして楽しい集いがありました。

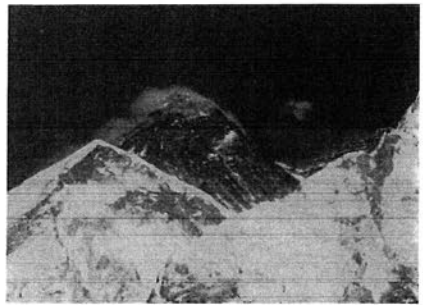
なお、四名の方にスピーチをお願いしましたが、寄付金贈呈式などセレモニに時間を費やし、通訳、進行の不手際も重なって、出席された皆さまにご迷惑をおかけする結果となっていました。しかし、国際親善交流を理解してくださっている会員の方々に助けられ、滞りなく和やかにレセプションはお開きになりました。感謝いたします。

後日、ネパール山岳協会関係者より丁寧なお礼と喜びが伝えられました。国際交流、国際親善に大きな意味があったと確信しています。

海外の山

エヴェレスト韋駄天登頂の意味

写真・文 江本嘉伸



カルパタールから見たエヴェレスト

インターネットの画面上に、にっこり笑った登山家の顔があらわれる。「悪天候で挑戦は一週間先になった」と、カトマンズからの情報が伝えられている。「今回の挑戦のスポンサーはツボルグ・ビールで、サンミゲル・ビールではありません」というコメントが書か

れている。カトマンズでこのふたつのビールを知らない人はいない。

一九九九年冬の一報は、タジキスタンのアク・スウ(五二一七メートル)の高度差一七〇メートルの北壁を完登したロシアのクライマーから寄せられた。パーベル・シャブリンをリーダーとする三人で、十二月八日登攀を開始し、二十二日登頂を果たした。三人は十一月に「冬の大岩壁計画」を発表し、世界中の困難な壁の冬季登攀に挑戦する、と表明していた。

この大岩壁には別にふたりのロシア人クライマーが挑み、十八日間をかけて十二月三十一日登頂、頂上で越冬したという。アク・スウの北壁の冬季登攀ははじめてという。

アク・スウの困難な登攀とは質を異にした、わかりやすい試みが昨秋、ネパールで行われた。

九八年秋、五人の仲間に支援され、エヴェレストに向かった。チャンスは十月十六日訪れた。

午後四時ベースキャンプをスタートしたカジ・シェルパは、翌十七日午前六時には八七〇〇メートル地点に達した。荒れ模様の天候がおさまるのを待ってここで三時間ねばったという。そして、午後十二時二十四分登頂。「十八時間以内」の目標は達成できなかったが、「二十時間二十四分」のスピード記録を作った。

カトマンズに下山した英雄を数

百の市民が歓迎した。九三年春、ネパール女性初登頂をねらって惜しくも下山途中死んだバサン・ラムの時の盛り上がりとは質を異にしたが、新聞もテレビもこの「偉業」を大きく報じた。「ツボルグ・スピード・エヴェレスト・エクスペディション」の成功の意味は、その記録にあるのではない。これまででもっとも先進各国からの「お客」を登らせることを使命としてきた「ヒマラヤ案内人」が、自分の榮譽のために自分の登山をしたことに、価値があるのだ。

「これでソロクンブー地域のシェルパは、エヴェレストに関して三つ目の偉業を達成した」と、カジの支援者は、インターネットで語っている。最初に登ったテンジン・ノルゲイ、最多登頂(十回)のアン・リタ、そしてカジ・シェルパの最速登頂というわけだ。

ヒマラヤ登山にシェルパの活躍がつきものであることは、誰でも知っている。最近ではカラコルムの山にまでネパールのシェルパを連れてゆくようになって、パキスタン側の反発を招いたほどだ。

「屈強にして従順」がシェルパ族の形容詞となってきたが、実はシェルパ世界の内実はゆっくり変わろうとしている。

もともとシェルパが山の仕事を始めたのは、インドのダージリンだった。それがヒマラヤ登山のポピュラー化とともに、主軸がエヴェレストのあるクンブ地方に移った。ナムチェバザール、クムジュン

のふたつの村がその中心で、多くのすぐれた山岳ガイドが生まれ、時には生きて帰れなかった。

そのクンブ地方でも、他人の登山のために危険なことを犯したくない、という風潮が次第に強まっているらしい。かわって、少しずつ他の地域の住民がヒマラヤに入るようになり、タマンなどシェルパ以外の民族も参入しつつあるという。シェルパがすべてやってくれる、という決

めつけは少し考え直したほうがよい。

報告

REPORT
2月日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

指導委員会

平成十年度

大学山岳部監督会議

学生指導委員会主催の大学山岳部監督会議は、今回は東海支部が主管することになり、十月十四、十五の両日、名古屋の奥座敷ともいえるべき奥三河の「やまびこの丘」(愛知県南設楽郡鳳来町)で開催された。ここは平成八年の全国支部懇談会にも使用したところで、宿泊棟の中には会議室もあり、すぐ前には「ぶっばうウォール」という人工壁もあって、登山者の集会にはもってこいの場所である。ただ難点は新幹線豊橋駅から、東名高速豊川ICからも一時間前後かかることである。

過去にはリーダーの法的責任や部員不足の問題が主要なテーマであったが、今回は趣向を変え、「遭難を起こさないために——雪崩と登攀、

その最新理論と最新技術——」と題して行うこととなった。

当日は野外実技を伴う今回の集会にふさわしい好天に恵まれ、定刻の午後二時半ややすぎ、今会議担当の寺西東海支部副支部長の司会により、宮崎学生部担当理事、中世古東海支部長の挨拶の後、直ちに初日の講義に入った。

最初に基調講演として「ナイロンザイル事件の教訓」と題し、東海支部の創設者の一人である石岡ザイル研究所所長の石岡繁雄氏の講話を聞いた。昭和三十年一月、前穂高東壁で氏の実弟がナイロンザイル切断により死亡して以来、ナイロンザイルが岩角に極めて弱いことを訴え続けてきたが、国がそれを認め、昭和五十年六月にザイルの安全基準が制定されるまでに二十年の歳月を要した。その間ザイル切断による死亡者は二十人を数えた。

氏はその後もザイルをいかに安全に使うかの研究に没頭し、最近やっと思に近い確保用ショックアブソーバーを開発したと話し、聴衆に感銘を与えた。

続いて、文部省登山研修所所長の柳沢昭夫氏による「最新の確保論」に移った。柳沢氏は数値を使って墜落時のザイルや金具、墜落者や確保者にかかる負担を説明し、確保の重要性を説いた。氏も当初、実際の数値が分からず、文登研に石岡氏を招き二日間徹底的に教えを受け理解できたとのことで、二人の講師の話にはザイルの性能を理解して使うことの重要性が語られていた。また柳沢氏は豊富な登攀経験から得た結果として、既成ルートを数多く登るよりも未知の壁にルート開拓することが実力のつく道などと、確保以外にも教えられることが多かった。

最後に登場した富山県カルデラ砂防研究所主任研究員の飯田肇氏は、模型を使って雪崩発生メカニズムを説明し、どのような状態の時に雪崩が起きやすいかを、多くの事例をあげて説明した。

初日の講義を終了し、引き続き食堂にて懇親夕食会、さらに大広間に席を移し歓談、法政大のエーデルワイスの歌を皮切りに各大学の歌、農大名物大根踊りなども飛び出して

宴は大いに盛り上がった。

翌十五日は柳沢、石岡両講師が時間不足で前日話せなかった講義の続きを行い、十時より、ぶっばうウォールを使って柳沢、滝根正幹東海支部員の指導で学生に最新の確保術の講習を行った。こうした指導を受ける機会の少ない大学にとっては、大変参考になったと思われる。

昼食後の十二時三十分、予定通り会議を終了し、解散した。解散後も熱心に確保の指導を受ける学生やウォールに登る学生で、完全に終了した時は、はや夕闇が迫っていた。

今回のテーマは大学山岳部に限らず、クライマー全体の問題である。大学山岳部にとって最大の問題は部員不足に尽きるといっても過言ではない。そこで次回以降は、

①高校の山岳部員がなぜ大学で山岳部に入らないか。

②新人募集のパンフレットなどを共同で作成する案。

③一口に大学山岳部といってもレベル、山行日数にも差があり、それぞれに適した方法の検討が必要、などといった意見が監督、コーチの方々から出された。

今、山は中高年登山者であふれ、日本山岳会もその例にもれず、中高年会員で隆盛を極めている。しかしわれわれが若い頃期待して入った日

本山岳会とは、かなり異質な姿とな
っている。日本山岳会を正しく発展
させるためには、その最大の供給源
である大学山岳部の育成は極めて重
要といわねばならない。またそれが
日本の登山界の質を高めることに
つながるものである。中高年対策も大
事だが、もっと学生や若年層対策に
力を入れてしかるべきである。

参加者は十七大学二十四名の学生、
十八大学三十六名の監督、コーチ、
OB及び東海支部関係者、講師三名
の六十三名。遠隔地のため前回より
参加者が減少したが、愛知県で行
われながら、東海地区から二大学の
参加のみというのが、東海地方の大
学山岳部の惨状を示している。ほと
んどの大学が山岳部活動をしていた
当時を知る者にとっては淋しい限り
である。

(中世古隆司)

科学委員会・シンポジウム

科学的にとらえた中高年登山

「先の組 後に続くも 中高年」
昨今のこうした登山道の賑わいさな
がらに、十一月二十八日、会場の明
治大学大学院講堂は、若々しい中高
年で満席となり、補助椅子を並べる
ほどの盛況であった。地方支部の会
員、一般公開のため非会員を含め、
百六十名余の参加があった。

■体力を認識し、実態を知る

最初、大森薫雄副会長がスポーツ
ドクターの立場から「山で困る病気
とメデイカル・チェック」と題して
登山によって発生する身体の障害が
ないかどうかなどを医学的に検査す
ることの大切さを説かれ、主に膝と
腰の疾患について、豊富な臨床例を
あげながら講演された。

続いて、神奈川工科大学の高橋勝
美助教の「登山における関節の動
きと筋肉の負担」と題する詳細な研
究報告。それは身体動作学から見て
登山を「傾斜地の歩行による上り下
り運動」としてとらえ、トレッドミ
ル上の歩行実験から得られた膨大な
データを通して、下肢筋肉の負担度
を定量的に検討されたものである。
続く鹿屋体育大学の山本正嘉助教
の演題は「中高年者のからだ」と登
山。専門の運動生理学の視点から、
脚の筋肉の働きが上りと下りでのど
のように違うものか、なぜ下りで事故
が多いのか、そして安全に登山をす
るための正しいトレーニング方法
(驚いたことに今は兎飛びはよくない、
腹筋強化は膝を曲げて、など)
に重点をおいて話された。

詳細にはここにご紹介できないが、
実には峻に富んだ内容で、基調は中
高年登山者が自分たちの体力の特徴
をよく認識し、最近の実態を知り、

登山行動は身体的にどういうものか
を理解し、常にトレーニングを積む
ことの必要性である。

人間の体力は二十歳を頂点とし、
歳を追って衰えていく。最も低下度
の大きいのが平衡性を示す閉眼片足
立ちと脚筋力とのこと。その他、柔
軟性や敏捷性、山本講師がまとめて
行動体力とされるものと、中高年者
のまだ若いという思い込みや期待と
の間にギャップがあり、若いころと
同じような体の使い方では、無意識
のうちに無理になっている。

さらに中高年者は、激しい運動、
気温気圧の変化など、身体にかかる
ストレスに対する抵抗力が低下して
いる(血圧が上がりやすい、体温調
節機能の衰え、骨が脆くなっている
など)。したがって大森講師は自覚
症状のあるなしにかかわらず、計画
的に系統的に検査を受けるようすす
められる。

しかし検査の結果、高血圧症で
あっても、たとえ冠危険因子をもっ
ていても、直ちに山へ行つてはいけ
ないわけではなく、対処法を心得て
よくコントロールしていれば、山登
りは十分楽しめる励まされもした。

■トレーニングは継続してこそ

さて長い間使ってきた体、四十歳
を過ぎると体力差が大きく、山本氏
は車にたとえて「中高年者は中高年

車である」と。それまでの手入れの
違いが歳とともに差を広げる。同年
代の人がやっているからといって同
じことを自分もと思うなかれ……。

そこで、今ある体を上手に使い、
改良されてきた装備も十分利用して
負担を少なくすると同時に、登山に
大切とされる体力をつけていくのに
はどんなトレーニングがよいのか。

大森講師は、呼吸循環機能を表わ
す最大酸素摂取能力も加齢により直
線的に低下するが、訓練をしている
人は各年代とも二、三割高い。山の
登りにとくに必要なこの機能を十分
に働かせるに適したトレーニング法
として速歩きを推奨されている。

山で体重五〇キログラムの人が本
格的に八時間歩くと、エネルギー消
費量はフルマラソンの二倍に当たる
という、山本講師の指摘には驚いた。
ストレッチングは、登山の前に行う
と柔軟性が改善されて怪我を防ぎ、
下山後に行えば疲労回復に役立つと。
喜び合って乾杯と行く前に、五分で
よいからストレッチングをゆっくり
とやる効果は大きいということだ。

今回、とくに大腿四頭筋の重要さ
がよく理解できたが、いずれのトレ
ーニングにしても間が開きすぎれば
現状維持もおぼつかなく、継続して
こそ力になるものである。山本講師
が最後に強調された、知ったことを

山岳保険募集中

加入会員が1000人を突破!!

- ①保険料が大幅値下げ(30%)。
- ②遭難捜索費が最高200万円まで可能。
- ③賠償責任特約(約1億円)付。など、大幅に改良されました。ぜひご加入ください。
- お問い合わせは総務委員会まで。

新たに始めてほしいし、続けてほしい、という言葉が大変印象深く残った。各トレーニングの実際は、本誌六三七号の特集を参照していただきたい。

■中高年登山の実践例報告

休憩の後、中高年登山の実践例について、三人の講師を迎え話していただいた。

「ヨーロッパアルプスを案内した経験から」と題した、倶楽部Yettiの雨宮節代表は、二十年来登頂ツアーを企画、実践してこられた。「山の道具でなくてよいものはない」と断言され、歳をとったら道具にカネをかけて行うこと。また登山には何といっても体力と強調。専門家の山トレナーがいないこと、昨今のツアーコンダクターつき旅行登山の弊害にも触れ、高いところ、難しいと

ころと狙わないで、山は自分の体力にあわせて登るもの、と結ばれた。

次に読売文化センター講師でもある中川武JAC常任評議員が、長年の登山教室講師として、山のことを情熱的に素直に吸収していく生徒さんたちが、山で感動する様子に感動し、自分も学ぶことが多いと話された。遭難が組織に入っていない人にも多いこと、山は個人で登るものだが、義務として事故のないよう地道なトレーニングを積み、安全で楽しい登山を目指そうと。

最後の講師、渡邊玉枝JAC会員は「五十歳からの八千メートル峰」と題し、チョーオユー、ダウラギリそして昨夏のガッシャブルムII峰に幸運にも登れた、と謙虚に話された。五十歳以上で構成されるシルバートールとの八年前の出会いから、五十五歳を過ぎて体力の減退を痛感しながらも、不足がちでも独自にトレーニングを積んで、シェルパ、ハイポーターの力を借り、酸素も使って果たされた快挙である。その淡々とした気負いのない話しぶりに、無理をしないで楽しく安全にという信条がうかがえた。

“科学的にとらえた”のテーマで催された今回のシンポジウム、多く出た質問の傾向から見ても、たとえば下りにとるべき姿勢がなぜ理に適っ

ているかを知っているだけでも、科学的な理解は、実際の山の上下りに必ずや役立つものと思われる。

中高年には中高年の道がある。安全で楽しい登山の道である。

(福山美知子)

●当日の予稿集を希望される方は、六百九十円の郵便為替を同封して、八王子市横川町九五四一三〇 北野忠彦までお申し込みください。

百年史委員会

会員名簿探しについて

「山」六四〇号で、二名の方から名簿を提供していただいたことを報告しましたが、その後さらに左記の二名から七点の提供がありました。記して謝意を表します。

京都支部 薬師義美会員提供

・山岳第九年第一号付録の名簿

・山岳第一五年第二号付録の名簿

・山岳第一九年第二号付録の名簿

・山岳第二三年第一号付録の名簿

関西支部 柏木宏信会員提供

・山岳第五年第一号付録の名簿

・山岳第六年第一号付録の名簿

・山岳第一〇年第一号付録の名簿

したがって、提供いただきたい「山岳」付録の会員名簿は以下のとおりです。皆さまのさらなるご協力をお願いします。

・山岳第三年(明治四十一年)付録

・山岳第四年(明治四十二年)付録

・山岳第八年(大正二年)付録

・山岳第十一年(大正五年)付録

・山岳第十二年(大正六年)付録

・山岳第十三年(大正七年)付録

・山岳第十七年(大正十一年)付録

・山岳第二〇年(大正十四年)付録

・山岳第二二年(大正十五年)付録

・山岳第二四年(昭和四年)付録

・山岳第二五年(昭和五年)付録

なお、昭和七、九年、昭和十二、十三年の会員名簿をお持ちの方、ご連絡いただければ幸いです。

(松田雄二)

三水会・現地集会

高尾山

十二月十二日、京王高尾山口に午前十時集合。参加者二十五名。

稲荷山コース、琵琶滝コース、四号公路の三コースに分かれて出発し、高尾山頂を経て奥高尾縦走路入り口、もみじ台着十一時三十分。今年は紅葉が遅く、モミジが真っ赤に色づいていた。

ここで、長老の音頭で乾杯し、九年の打ち上げに入った。二時間ほど懇親会を行って散会。晴天で人も多く、気持ちのよい山行ができた。

(石田稔郎)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
リポートします。

岩手支部

そっとおきの秋峰 真昼岳

十和田・八幡平と焼石・栗駒の火山列に割り込む南北約五〇キロの山域は、奥羽山脈にあつてさらに真昼山地という名称を合わせ持つ。この一帯が非火山性の隆起造山によるためのものか、山容も周囲の火山群とは趣を異にする。一九九八年、秋の例会山行には、その盟主である真昼岳（一〇五九メートル、最高峰は和賀岳）が選ばれた。

十月十一日朝、前郷集落から西に曲がって新装なった真昼温泉を過ぎ、九キロほど入った夷平コース登山口の広場で下車する。踏み板の心もとない吊り橋に揺られて本内川の清流を渡り、道なりに進んで支沢に出会

う。地形図の点線はそのまま右岸を遡行しているが、ここでは徒渉して急登路に取りつのが正しい。

右前方に二〇メートルはあろうか、見事なナメ滝を見下ろして一息入れ、しばらく尾根道をたどる。広大なブナの二次林が、秋の陽光を透かして黄色に膨らんでいる。前方に青空が見え隠れする低木帯を抜けると、視界が急に開けて夷平に達する。左手間近に丸みを帯びた女神山、また右手、北西の丘には真昼岳の山頂域がのぞく。さらに秋田の善知鳥（うとう）コースと合流する県境尾根に出れば、突如現れる鳥海山の見慣れぬ大きさに驚き、その近さを実感する。富士山に似た台形の山頂が秋風に吹かれ、日本海側に幾分流されたような形が面白い。

長い鞍部を抜け、頂上に見えていたピークにたどり着くと、山頂はさらに北側の小丘で、真昼三輪神を祀るトタンの鞘堂が銀色に輝いている。山名のヒルには、古くは蛭や蒜が当てられたというが、まことに明るいイメージには真昼こそふさわしい。それは、横手盆地を駆け抜ける厳しい季節風が森林限界を押し下げ、山頂域には一面の笹原しか生育を許さなかったことによるのだろう。

歩きはじめてほぼ三時間、弁当を広げてから記念写真、南方に焼石連

峰、東方に早池峰と薬師岳、そして北にたおやかな和賀岳、その肩越しには入山規制の続く岩手山頂のツンと尖ったシルエットを認めた。

千メートル余の低山とは思われないう、そっとしておきたい山の一つが、そこにはあった。（松田和弘）

岐阜支部

秋季集会「雨乞岳」

登る山と集合場所、時間を決めておき、登りたい人が集まって一緒に登る、岐阜支部の現地小集会（日帰り登山）。春秋二回実施しており、昨秋は十一月三日、鈴鹿の雨乞岳で行われた。

集合場所の武平峠には、高木支部長以下十九名の参加者が集まった。清山橋を渡ってすぐ右手にある登山口から登りはじめる。しばらくは多人数が休憩する場所もないような、山腹を巻く狭い山道が続く。小さな乗越を過ぎ、沢谷に入ると少し開け、ようやく休憩場所が見つかった。

この秋は気温が高かったことと、中部地方を台風が二度も通過したことで、鈴鹿でも例年のような美しい紅葉が見られない。全般に紅葉が遅れており、色も鮮やかさがなく、黄色ばかりで紅色が少ないようにだ。

神崎川源流部の、複雑に入り組ん

だ沢につけられた登山道では、ところどころで大木が倒れて道をふさいでいたり、杉の大木が巨人の手でへし折られたかのように、大変に荒れていた。室生寺の五重塔が倒木で大きな損傷を受けた時の台風七号がこの付近でも猛威を振るったらしい。

コクイ谷への分岐を右手に見送ってクラ谷に入り、きれいな流れを縫って進む。流れが次第に細くなり、水音が途絶えるあたりで、ブナやミズナラが黄葉した美しい林が現れた。「七人山のコル」と呼ばれているところである。ここからは稜線上の笹のトンネル道となる。雨が降ると川になるらしく、塹壕のように深くなつたところもあり、とても歩きにくい。やがて笹が低くなり視界が開けると、東雨乞岳の頂上は近い。

山頂には視界を遮るものはなく、御在所山や鎌ヶ岳など三六〇度展望できるが、先を急ぎ、馬の背のような吊り尾根を、笹を分けながら、三等三角点のある本峰へ向かった。

この雨乞岳は、御池岳に次ぐ鈴鹿第二の高峰で、山名のとおり、昔は愛知川流域の農民たちにより雨乞いの儀式が行われていた山である。山頂に「大峠ノ沢」という妙な名前の山上池がある。笹の中に埋もれた小さな池だが、早魃の年でも涸れることはないそうである。（村田正春）

越後支部

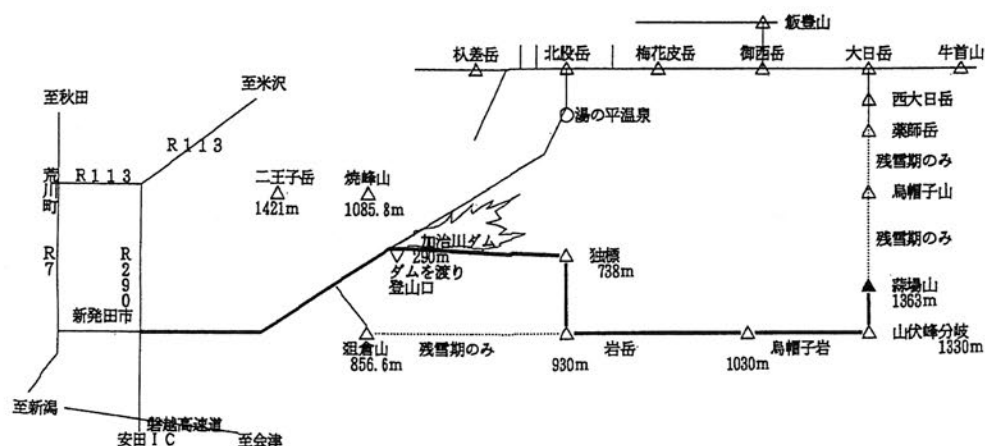
マタギが駆けめくった飯豊の隠れた名峰
『蒜場山』

広場山、蛭場山の俗称もあり、現在も熊狩衆の猟場になっている飯豊連峰大日岳から西に延びる尾根の末端にある。山容は秀れて男性的で地域の岳人憧れの山であるが、登山道がなく、飯豊特有の雪で痛めつけられた密蔵のため一般向きでなかった。これを地元の山岳会が自力で登山道を伐開し、昨秋ようやく完成した。

最初急登が続く、標高一〇〇〇メートルでは天然杉の古木、ブナ、ナラなどが混生している。シャクナゲの古木も随所にある、運がよければ熊、羚羊、野猿などにあうことがある。樹間に見える岩峰、組倉山は猟師が熊を追い上げるところだ。喬木がなくなり一〇三〇メートル烏帽子岩に登ると急に展望が開け、飯豊の懐の深さを実感する。頂上から東に目を転ずれば山並み遙か、泰然とそびえる飯豊の主稜はまさに庄巻である。西は下越の沃野の彼方、日本海に浮かぶ佐渡島が指呼の間に望める。



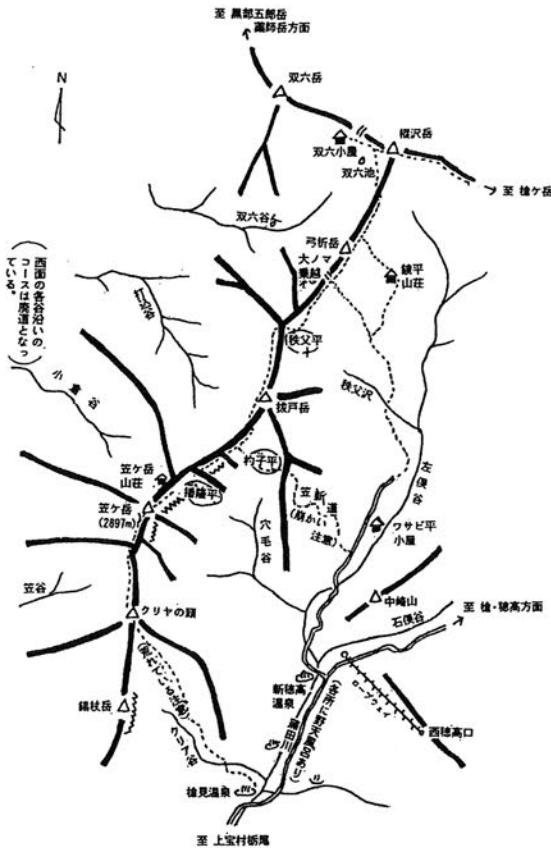
当欄についてご意見、ご感想、またおもしろいアイデアなどがありましたら、お寄せください。
総務部



1	コースタイム	新発田駅-タクシー40分-加治川ダムサイト登山口-90分-岩岳-50分-烏帽子岩-80分-山伏峰分岐-20分-蒜場山-60分-烏帽子岩-40分-岩岳-80分-登山口(含休憩)
2	記 録	1997年10月5日開通した新しい山のため記録は発表されていない。
3	地 図	国土地理院(25,000/1地形図) 蒜場山 東赤谷
4	交 通	JR羽越線新発田駅下車 東赤谷行きバスはあるが登山口の加治川治水ダムまで5kmくらい徒歩となる。新発田駅よりタクシーが一般的。
5	付近の観光地	滝谷森林公園(飯豊川流域最奥集落の滝谷地内、ログハウス5棟、宿泊可能、自炊・要予約)。湯ノ平温泉(飯豊川上流の蒜場山登山口。加治川治水ダムより車で約40分、駐車場より徒歩1時間30分ブナの原生林に行く。新発田市営の山荘・自炊、宿泊可)
6	そ の 他	
7	参 考 図 書	冬期、残雪期に新潟県内の一部山岳会が縦走などの記録を有するのみで未発表のため、参考書籍等は皆無。
8	問い合わせ先	五十嵐篤雄(会員番号2785) 田邊信行(会員番号10786)

岐阜支部

静寂と眺望の素晴らしい名峰 笠ヶ岳



名だたる北アの山々の多くは富山・長野県境にあるが、笠ヶ岳こそは岐阜県内の最高峰であり、しかも、均整のとれた山容の美しさはひときわ目立っている。

笠ヶ岳は、表銀座コースの縦沢岳から南西に派生する笠ヶ岳支稜の主峰である。この支稜が、東面の蒲田谷と西面の双六谷とを分割している。この支稜は、途中、秩父平、杓子平、播隆平などの古い氷河地形を抱えながら笠ヶ岳へと続いているが、ハイマツ帯とお花畑を縫う稜線のプロムナードは、自然との一体感と安らぎを十分覚えさせてくれるに違いない。

笠ヶ岳周辺の山のよさは、何よりも山域全体の静けさと、眺望の素晴らしいさであろう。とくに蒲田谷を挟んで眺められる槍・穂高連峰の大パノラマは、まさに北ア指折りの大景観である。

1	コースタイム	笠新道コース 新穂高温泉－60分－笠新道入り口－4時間30分－杓子平－2時間10分－笠ヶ岳山荘－10分－笠ヶ岳 クリヤ谷コース 槍見温泉－2時間－錫杖沢出合い－4時間－クリヤの頭－2時間20分－笠ヶ岳－05分－笠ヶ岳山荘 双六小屋からの縦走コース 双六小屋－60分－弓折岳－20分－大ノマ乗越－1時間40分－秩父平－1時間30分－抜戸岳－1時間30分－笠ヶ岳山荘－10分－笠ヶ岳
2	記 録	
3	地 図	国土地理院 (25,000/1 地形図) 笠ヶ岳 三俣蓮華岳
4	交 通	J R高山線高山駅下車、バスで平湯温泉經由新穂高温泉まで (約57km、1時間40分) マイカーは直接新穂高温泉まで入れる。
5	付近の観光地	新穂高ロープウェイ (新穂高－西穂高口 15分) 奥飛騨温泉郷 (平湯・福地・新平湯・栃尾・新穂高) 冬期はスキー場 (平湯温泉スキー場・新穂高ロープウェイスキー場)
6	そ の 他	笠新コースは杓子平下部で登山道の一部が崩壊したため、笠新道入り口からコースがつけえられた。クリヤ谷コースは近年余り利用されないため、クリヤ谷と渡渉点および上部稜線は荒れているので要注意。笠ヶ岳東面は穴毛谷に面し変化に富む岩壁で、クライミングの対象となっている。
7	参 考 図 書	日本の名山『槍穂高と南部北アルプス』(ぎょうせい) 『岐阜百山』(岐阜新聞社) 『日本の山1000』(山と溪谷社)
8	問い合わせ先	伊藤茂 (会員番号6837)

福島支部

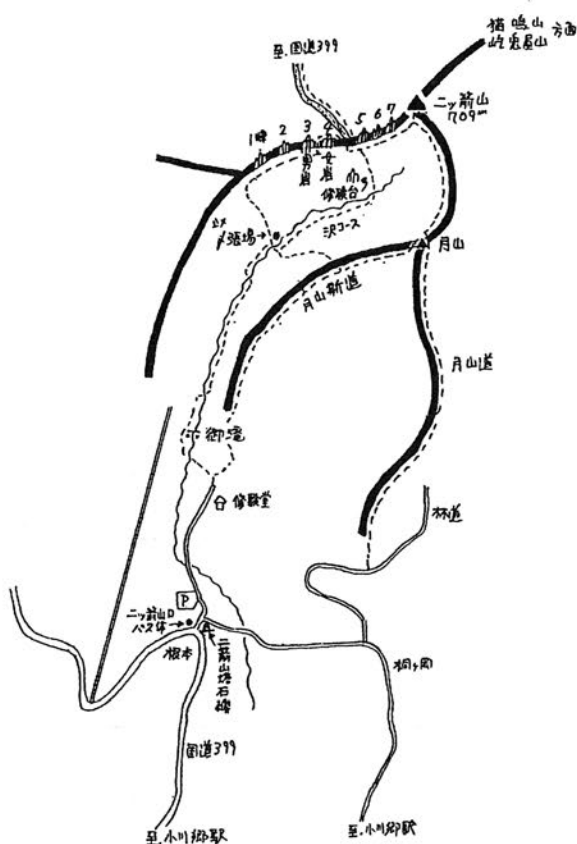
阿武隈山地の霊山
『ニッ箭山』

郷土誌によれば「両峰高く峙ち恰も二つの箭(矢)をたてたるが如きを以つて此の稱あり……」と。山麓のニッ箭山神社は治安三年(一〇三年)勧請とあるから、修験の霊場としてこれ以来登られている。今でも「寛永通寶」「寛永通樂」の古銭が拾われて、登山史の証にもなっている。

このニッ箭山、規模は小さいものの一峰から七峰までの岩峰が稜線上を頂上に向かって

連続している。多くの人が登るのは三峰(男岩)四峰(女岩)で、ルートには鎖が設けられて登山を容易にしている。展望も素晴らしく東に太平洋、西に那須連峰、磐梯山などが望みできる。春のアカヤシオ、秋の紅葉も見ごたえがある。

冬の気圧配置になる十二月から二月は太平洋側は快晴が続く、それに登山者も少なく静かな山旅が味わえ最高の時期である。



1	コースタイム	磐越東線小川郷駅-80分-根本ニッ箭山口バス停-120分-4峰(女岩)-15分-ニッ箭山頂-月山-60分-バス停-70分-小川郷駅
2	記録	岳人97年10月号
3	地図	国土地理院(25,000/1地形図)水石山 川前
4	交通	J R磐越東線小川郷より徒歩 J R常磐線いわき駅より(菱川町発)常磐交通バス内倉行き(平日のみ1日3便 6:10 14:10 17:30) 常磐交通バス・Tel: 0246-23-1151 常交タクシー・Tel: 0246-29-2343
5	付近の観光地	背戸峨廊溪谷(J R磐越東線江田駅より徒歩15分 周遊4時間) 国宝白水阿弥陀堂(J R常磐線いわき駅または内郷駅より川平行きバス) 石炭化石博物館(J R常磐湯本駅よりタクシー) いわき市役所・Tel: 0246-22-1111
6	その他	ニッ箭山だけでは物足りない人の健脚向き。ニッ箭山西方直下の国道399茱萸平1号橋より加路川沿いの林道終点から屹兎屋山~猫鳴山~ニッ箭山~根本集落、またはその逆。所要時間8~9時間。冬期の快晴が続く中、落葉した雑木の梢越しの展望がよい。
7	参考図書	郷土誌『石城郡誌』『小川町勢要覧』 分県登山ガイド『福島の山』
8	問い合わせ先	吉田元(会員番号6811)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします)



イラスト 野田四郎

水雲山三ツ峠大権現

山本健一郎

平成十年の夏山計画をそれぞれの胸に落ち合った四人が、期せずしてどこかで汗を流し、体調を調えようということになった。藤田礼子、山崎浩子、保坂恵子、小生がその顔ぶれである。やがて山崎さんから、本社が丸に行くとの連絡があり、いささか暑そうだとは思ったが、この三人に逆らう度胸は持ち合わせていないので、汗をかくのもよからうと出かけることにした。

七月十二日の朝、都留でタクシーを拾い、大幡川沿いに御座石の集落の奥まで行って歩き出した。三ツ峠の裏登山道を左に分け、一時間ほどで林道が終わり、右岸にわたるとすぐに送電線の鉄塔がある。何年か前

に横山厚夫さんに教えられて登った記憶に従い、ここから送電線の巡視路を三ツ目の鉄塔までたどれば清八峠はすぐのはずと、今にも降り出しそうな空を眺めて登りはじめた。

左上に見える二番目の鉄塔を目指していくうちに、これがガスで見えなくなり、道も怪しくなってきた。鉄塔のほうに川床の落ち葉を踏みながら登っていくが、肝心の目印が見えない。ままよと適当に登る羽目になる。戻って道を探すのも業腹だし、稜線に出れば三ツ峠と清八峠の間に出るはずとばかり、藪の中を遮二無二登った。右手は大幡川のほうに深く切れ落ちているので、その右岸の尾根をいやでも登ることになる。尾根の上にあるいくつかのコブを乗り越えて行くのに時間がかかる。それでも稜線が近くなったようで、木立に隙間が見えてきた。

ずいぶん時間がかかってしまったな、と思いながら前を見ると祠がある。やれやれと祠に近づいて向うを見たが、急な崖で、道など見当たらない。四人で呆然とあちこち覗くが、どの方向も急な岩場で、降りるのも容易ではなさそうだ。高度計は一五五〇メートルを指しているが、ガスのため位置が分からない。

五〇センチ四方くらいの祠も古ぼけて痛みがひどい。中の石碑には文政四年建立と彫ってあるし、本のケースのような形のブリキの入れ物に、登山者名簿と書かれたノートがあるが、大正四年頃の日付である。一升瓶が二本転がっているが、最近人が訪れた形跡はない。タイム・スリッパしたような妙な気分で、一同顔を見合わせた。四人いるからよいけれど、一人だったら背筋が寒くなるに違いない。

気を落ち着かせて相談するが、これではきた道を引き返すしかないということは皆わかっていて、ところどころが稜線に出れば何とかなるとばかり、ひたすら登ったので、登ってきたルートに戻れるか、皆自信がなさそうな顔をしている。「まだ暗くなるまで五時間はある」「ライトを持ってきてよかった」「明日は月曜日なので会社に行かなくては」など、かなり深刻な会話も交わされたのだから、

その時の様子をご想像いただければよい。意を決して元来たほうに降りはじめた。幸い途中で折っておいいた小枝を見つけたが、四人の記憶を頼りに元来た方向に何とかあやまたずに降りて行けた。これが一人では難しかったろう。しばらくすると、うまくつけられた古い道型が見つかり、二度ばかりこれを見失って右往左往したけれど、何とか最初の鉄塔がすぐ真下に見えるところまで降りてきて、無事振り出しに戻った。汚れた衣服を気にしながらタクシーに乗り、瓜生で風呂に入ったら、長い日も暮れ激しく雨が降ってきた。

しかし、狐につままれたような気分である。翌日横山厚夫さんに電話したが、そんな山は知らない、とおっしゃる。山村正光さんと、天下茶屋の長澤洋さんも初耳だとおっしゃる。この三人がご存じない山に登ったとはなはだ愉快だが、それがどこかわからないのでは釈然としない。涼しくなり、木の葉が落ちてから再訪しようということになった。長澤さんが、地元の面子に関わるといういろいろ調査し、戦前に刊行された鉄道省の「中央線に沿う山」には、大幡から直接御巢鷹山と開運山の鞍部に出るルートが出ていること、山溪の「日本の山一〇〇〇」の三ツ峠の写真には、この尾根の上に目立つ

俳句

三水会 雪嶽山山行

吉武玲子

水簾洞溪谷

一瀑の懸りて梅雨の溪ふかし

谿深く大山蓮花傾き咲く

ハンゲルの地図をひろげる青嶺かな

小青山荘

ヒュッテの扉ひらく咫尺に梅雨の霧

韓国の梅雨のヒュッテの雑魚寝かな

千仏洞溪谷

千仏に見立て岩山さみだるる



俳句

泣面山 (宮城県)

川崎精雄

斜面急落葉なだれを泳ぎ攀づ

急斜面落葉に埋もれ憩ひけり

掴まれば折れる木多し秋の山

藪に坐し林檎剥くとき通り雨

紅葉山虹の懸かりし異変かな

ピークがあることなどを発見、ご連絡いただいた。写真を見るといかにも信仰の対象になりそうなピークで、これに違いないと確信した。

十月下旬、長澤さんが御巢鷹山からこのピークを目指して下降、祠に行き着いて、なぞが解け、十一月二十九日には、藤田、保坂に山村正光山本稔、山田哲郎の三氏が加わり、この山の再訪を果たした。この物語の続編は、長澤さんか山村さんをお願いできたらと思っている。中島寛君は、遺骨をエベレストのBCに散骨してほしいと言いついてあつたのに逝ったが、私は水雲山のほうが好みに合っている、同行の三人にお願いしておこうかと思っている。

芦生の森を歩く・その4
— 幻の古代杉を尋ねて —

大口瑛司

芦生の森を訪れるのは東海支部にとって今回が四回目である。前回の六月に訪れた時、懇親会の席上で京都の井栗会員から「芦生の森に幻の四千年杉を発見」と新聞記事を掲げて披露された。それも一本や二本ではないらしいことも分かった。

早速、橋村自然保護委員長の発案で、十一月のJAC全国自然保護集

会が芦生の森で開かれるのを期に、幻の古代杉を京都支部と合同で探し、報告しようということになった。

調査は登山の興味も取り入れて、京都市左京区の桂川源流部にある広河原から入山し、美山町との境界となる主稜線に達し、古代杉のある尾根を探索と計測しながら由良川の源流に下り、芦生に至るコースである。

●十月六日 橋村、猿山両会員が主稜線までルート探索で、広河原からネジリキ谷—ホラの谷を目印をつけながら遡行して主稜線へ。

●十月七日 芦生側から橋村、猿山両会員が井栗(元熊打ち名人、京都支部員)、主原憲司(芦生の森シヤ

クナゲ研究者)両氏の案内で、雨の中を赤崎から尾根のルート工作と古代杉群の確認。

そして十一月十三日早朝、京都、東海両支部総勢十五名が広河原のバス停に集結。天気は上々、けっこう冷え込む中をネジリキ谷に沿って林道を歩き出す。朝の陽光は彼方の紅葉を楽しませてくれる。ホラ谷の合いには京都の高校WV部の小さな山小屋があった。しばらく使われた形跡がないところを見ると、今更ながら若者の山離れを寂しく思う。

林道が切れてからは路がなく、猿山先達にしたがって谷通しに行くが、少し離れると谷がいくつもあって先

●新ハイキング選書●
●第20巻好評発売中●

一等三角点の山々

山口ゆき子/横山 隆/高柳生雄/川越はじめ/
岡村美邦共著

A5版・310頁・定価1680円(税込)掲載の山 80山
新ハイキング社の一等三角点の山シリーズの三部作「一等三角点の名山100」「一等三角点の名山と秘境」「一等三角点の山々」も発売中
※3冊とも山は重複していません

●日本山岳会選定●話題の本・8刷増刷
日本300名山ガイド
〈東日本編〉〈西日本編〉

市川静子、岡田敏夫、岡部紀正 A5版・320頁
川越はじめ、廣澤和嘉 共著 定価各1680円(税込)
※著者はすべて日本山岳会会員です

新ハイキング社 東京都北区滝野川 7-6-13
☎(03)3915-8110 振替 00130-9-146915

行者の踏み跡を探すのに苦労する。途中わずかだが危険な個所ではザイルを固定して登る。それほどでもないと思われても、中高年登山ではこれを常套手段とすべきだろう。

主稜線に近づく傾斜も強くなり、見ると対面の植林帯の中にひととき大きな白い枯れ木が目に入った。樹種は遠くて判別できないが、複雑に

短歌

部子山のスケッチ―諏訪多栄蔵氏を

加賀要子

諏訪多氏が素描せし部子山の古き葉書見ており今日も雪降る窓に

疎開せし妻君の故里か奥越の山を越前の和紙に描きし

素描画の角に小さく記しあやsyo・20・7・3は終戦近き日

亡き人の描きし部子山の上の雲淡々として心をさそう

今のごとく削られし跡の無き山を絵に見て過ぎし時思ふなり

山の歌に惹かれし歌評の縁にて賜びしこの絵を額に掲げぬ

幹を伸ばし、見るからに古木と分かる。おそらく植林時に広大な周辺を皆伐され、生きて行く環境を失って枯れたのではないか。なぜか身勝手な開発を続ける人間の行く末を暗示しているように見える。

まばらな笹を漕いで主稜線に出ると明瞭な路があった。しばらくは主稜線を左右に気を配りながら歩くと、時々杉の古木が目に入るようになった。はやる気持ちを抑えて、先達

が偵察時につけておいてくれた目印のところで少し早いが昼食にする。前夜泊まった麓のみつた荘の弁当は思いもよらない豪華版で、さすが京都だと感心させられた。秋野さんから「ブドウの少し腐ったもの」といって差し出された水筒の美味な液体とともに至福の一時を過ごす。

さて、ここから尾根を下り本番の古代杉の探査である。胴周りを測る六ミリザイルを準備して下降開始。

最初に現れた古代杉は太い幹に大きな穴が縦にいくつも開き、中は空洞のうえ黒焦げになっている。これは猟師が中で焚き火をしたからとか。それでもなおしっかりと生きている。

あらかじめ用意したアルファベットの記入したプレートとともに記録写真を撮るが、大きすぎて根元部分しか入らない。不規則な形をした胴周りはザイルをまわして何とか測る



巨大な古代杉

が、樹高は素人集団の目測とする以外に手はない。

次々と現れる古代杉に感嘆しながら写真と計測を進める。おしなべて地表から四、五メートルまでは巨大な幹で穴が開き、芯部は大きな空洞となっている。傾ぐもの、偏平なもの、いびつなものなど実にさまざまで、そのうえ大きさの異なる主幹が数本立ち上がっている。中には間借りして気根を長く地表まで下しているナラの木さえある。

とても一本の木とは信じ難く、異様としか表現のしようがない。樹齢に至っては見当もつかないが、屋久島の縄文杉ほどではないから新聞記事の四千年は少々オーバーだろう。

われわれの目についた大きなものを計測した結果は次のとおり。

個体	樹囲(m)	樹高(m)	主幹(本)
A	8	40	8
B	8	25	5

	J	I	H	G	F	E	D	C
調査しながら気づいたが、ここは自然林としては珍しくブナの群落が少なく、その分広葉樹の樹種はこぶる豊富である。その中であって天然杉の濃緑の多さが晩秋の山に目立った。よほど杉の生育に適した土地とみえる。	4.8	4.5	5	9	9.5	9	9	5
	26	28	28	28	33	29	32	23
	3	4	2	5	5	8	7	5

ここは人跡未踏の地ではない。昔から森が利用され、傷つき、折れ曲がり、用材として価値のないものが多い。いく世代も放置され、芦生杉の生命力の強さといえ、古代理杉を生んだのではない。周りの林相が新しいだけにその感が強い。

探査を終えると偵察時の目印にしたがって急な尾根を時にはザイルのお世話になりながら下り、由良川源流のトロッコ道に出て芦生に向かった。当然のことながら探査行に使用の目印はすべて回収したが、生態系への影響を考えると、芦生の森とともに古代杉目当てのオーバーユースだけは避けなければと、切に願うものである。

図書受入報告 (1998年12月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
中村保 (編)	針葉樹会報 (1998.9 No.86) : 吉沢一郎追悼号	40pp/27cm	針葉樹会	1998	発行者寄贈
ボナッティ (著) 横川文雄 (訳)	大いなる山の日々 [第2刷]	227pp/18cm	白水社	1998	出版社寄贈
白山書房編集部 (編)	日本の溪谷 '97	265pp/21cm	白山書房	1998	出版社寄贈
熊谷権	K2からカイルスへ (熊谷権・画文集 No.11)	255pp/19cm	白山書房	1998	出版社寄贈
上野信弥	関東ぐるり一周山歩き: 山を越え川を渡り海岸線を歩いた1500km	196pp/22cm	白山書房	1998	出版社寄贈
三浦章男	おお悲し、泣くはみちのく岩木山: 山のはなしあれこれ II	304pp/21cm	北方新社	1998	著者寄贈
栗林一路	田口さんと話した午後: 山岳信仰をめぐって	8pp/27cm	栗林一路 (私家版)	1998	著者寄贈
栗林一路	弱者のアルビニズム	2pp/27cm	栗林一路 (私家版)	1998	著者寄贈
法政大学山岳部山想会 (編)	山想・第9号: 1989~1998	527pp/22cm	法政大学山想会	1998	発行者寄贈
伊万里山岳会登山隊 (編)	ネパール・ヒマラヤ チェオヒマル登山隊1991登山報告書	67pp/26cm	伊万里山岳会	1998	発行者寄贈
村上直温	風に乗って (画文集)	50pp/21cm	村上直温 (私家版)	1997	著者寄贈
静岡市山岳連盟 (編)	鎮魂の嶺 BROAD PEAK: 横田川・Bubb両君に捧げる	244pp/27cm	静岡市山岳連盟	1998	発行者寄贈
名越實 (編)	大空の女神パフィン島1998 [主催: 広島県山岳連盟]	70pp/30cm	メイト・ボーラーバー	1998	編集者寄贈
Jon Krakauer	Into Thin Air: A Personal Account of the Mt. Everest Disaster	293pp/24cm	Villard Book	1997	吉永英明氏寄贈
Hideki Ohno et al. (eds.)	Progress in Mountain Medicine & High Altitude Physiology	472pp/24cm		1998	発行者寄贈
(Publisher: Press Committee of the 3rd World Congress on Mountain Medicine & High Altitude Physiology / Matsumoto)					
Ram Kumar Panday	Japanese Language Education in Nepal	40pp/22cm	Nepal-Nippon Research Centre	1998	著者寄贈
Ram Kumar Panday	Development Disorders in the Himalayan Heights	440pp/25cm	Ratna Pustak Bhandur	1995	著者寄贈
Ram Kumar Panday	Pioneers of Nepalese Geography	138pp/22cm	Center for Nepalese Geography	1998	著者寄贈
Ram Kumar Panday	Altitude Geography Effects of Altitude on the Geography of Nepal	408pp/22cm	Center for Altitude Geography	1987	著者寄贈

ネパール国際山岳博物館募金応募状況

表記の募金にご協力くださった方々のご芳名を掲載し、お礼に替えさせていただきます。(敬称略)

16名 114口 570,000円 (1月11日現在) 累計930名 2,663口 13,334,517円

●60口 (300,000円)
京都大学学士山岳会

●20口 (100,000円)
明治大学体育会山岳部炉辺会

●5口 (25,000円)

明井克子 大森弘一郎

●4口 (20,000円)

西村正晃

●2口 (10,000円)

小幡二郎 坂井篤 猪又敦子

小田孝 小田晃士 金子丞二
木村康雄 鞍貫君子 稲田静代

●1口 (5,000円)

米川正利 藤田友生

会務報告

一九九八年十二月理事会

日時 十二月九日(水) 十八時三十分

～二十時二十分

〔出席者〕齋藤会長、小倉、大森、竹内各副会長、吉永、田邊、伊丹、熊崎、絹川、村井、飯田、鰐坂、増山、森、大蔵、宇田川、宮崎、坂本各理事、石橋監事、穴田、中川、中村、長尾各常任評議員

〔委任〕勝山理事、神崎監事、平山、平野各常任評議員

○議事に先立ち、事務局経理担当の高瀬さんが紹介された。次いで『山岳』担当の田邊理事から『山岳第九三年』の訂正願いとお詫びがあった。

【審議事項】

一、ガンカー・プンスム登山隊実行委員会(案)の提案。大森副会長

実行委員長・大森薫雄

実行委員会委員・齋藤惇生、小倉

茂暉、竹内哲夫、田邊寿、吉永英

明、伊丹紹泰、絹川祥夫、熊崎和

宏、増山茂、宇田川芳伸、鰐坂青

青、大蔵喜福、湯浅道男、平林克

敏、橋本清、村井龍一、重廣恒夫、

中村進、山本篤

次いで伊丹理事より偵察隊の報告。

二、アルバータ登頂七十五周年記念

合同イベント実行委員会(案)。伊丹

委員長・齋藤惇生

実行委員長・大森薫雄

実行副委員長・伊丹紹泰、増山茂

事務局長兼実行委員・熊崎和宏

実行委員・田邊寿、絹川祥夫、宇

田川芳伸、宮崎紘一、芳賀孝郎、

原謙一、益田幸郎、熊崎皆子

顧問・吉田宏

理事が交代した場合は、後任の理事

がその任に当たるものとし、必要に

応じて委員を増員する。承認

アルバータ峰初登頂時のピッケル石

突部分の寄贈は、長野高校OB会か

らの申し入れにより、当会が長野高

校より寄贈を受け、カナダ山岳会に

寄託する。長野高校、当会の行事な

どには頭部も一体となったピッケル

を貸し出せる等の条件を付し、資料

委員会理事に依頼する。承認

熊崎理事よりカナダ山岳会総会及

び年次晩餐会へ齋藤会長とともに出

席が報告された。

三、山研「ミニ水力発電計画」実行

委員会(案)の提案。小倉副会長

実行委員長・小倉茂暉

常任委員・吉永英明、坂本正智、

森武昭

委員・太田晃介、小川武、堀嘉余

子、井野千枝子、溝口洋三、浜崎

一成、本田栄三郎、野崎和彦、赤

羽孝一郎、中野和郎、石田要久、

松浦祥次郎、近藤善則

夏前に完成予定。坂本、森理事より、

メンテナンス費用、排水問題の説明

があり、神奈川工科大学と共同研究

することになった。承認

四、図書推薦の件など。

①博品社「日本の名山全二十巻別巻

二」について推薦または選定図書の

依頼があったが、今回は見送る。

②NHK「シェルパ極限に生きる」

のための図書室資料、本の撮影許可

願いは、作品に日本山岳会を入れ、

実費はいただく。承認

【報告事項】

総務委員会・絹川

①年次晩餐会は前年より百名少ない

参加者だが、第一回秩父宮記念山岳

賞の発表・受賞、皇太子殿下、妃殿

下のご参加と盛会であった。

②百周年記念事業の岐阜支部主管

「新日本山岳誌」は、関東をカバー

する人を決める必要があり、小委員

会をつくることになった。

国際山岳博物館募金・大森副会長

ネパールトレッキング・レセプシ

ョン時に目録を贈呈。覚え書きに山

岳会分と明記、今回のみであること、

完成時に日本の協力があつたことを

明記する、などが盛り込まれた。

免税措置・神崎監事

二万円以上の募金者には事務手続

きを取り、手続き不要者、他寄付と

合計して二万円以上となる人は申し

出てもらうこととした。

ネパールトレッキング・吉永

参加者百二十四名、好天もあって

無事終了。アンケートは今後の参考

とした。

科学委員会・森

中高年シンポジウムは十一月二十

八日、明大大学院講堂に百六十名余

が集まり大盛会。山本講師の講演は

実践的で示唆に富むものであった。

秩父宮記念山岳賞・竹内副会長

第一回授賞についての協力とお礼、

次回に向けての運営について報告。

来年度事業など・吉永

今年度の事業報告、収支及び来年

度事業計画、予算は二月初めまでに

提出を要請。

■会員異動

物故

青木昇(一七二二) 98・10・14

新井春美(九〇〇〇) 98・11・17

新井清(三七八二) 98・12・7

橋本正(四四七七) 98・12・7

安江安宣(一九六九) 98・12・11

退会

南里雄史(九四〇〇) 98・12・31

三谷千代子(一〇四六三) 98・12・31

終身会員

山本久子(四七六一)

吉武正子(四八〇六)

INFORMATION



◆第八回山の絵展開催

アルパインスケッチクラブ
五十名の会員が自分の足で登った
山々を描いた水彩・油絵・版画・ガ
ラス絵など九十点を展示します。

日時 二月二十一日(日)～二十七日(土)
十一～十九時(土曜は十七時)
会場 交通会館2Fギャラリー
(東京・有楽町)

TEL・〇三―三二―五七九六二
◆春の箱根湯坂路ハイイク

97同期会

昨秋台風のため中止した親睦ハイ
キングを、春の箱根路を訪ねる、と
して再度計画しました。

日時 四月十日(出)(前夜天気予報で
当日の降水確率が四〇パーセ
ント以上なら中止)

集合 小田急線箱根湯本駅前・九時
行程 箱根湯本―畑宿―鷹巣山―浅
間山―湯坂山城址―箱根湯本

駅(約三時間三十分)

懇親会 箱根湯本の温泉を予定(会

費四千円くらい)
申込 ハガキに①ハイイク参加②懇親
会参加③両方参加のいずれか
を明記の上三月末日までに日
本山岳会事務局・97同期会メ
ールボックス宛

問合せ 池谷健(Tel・〇四三―六
六一二四八五)

◆春の山行案内

ジャック93会

富士山と駿河湾を見渡せる浜石岳
で、お花見山行を開催します。春の
一日を楽しみましょう。

日時 四月十一日(日)

行程 由比駅―豊積神社―浜石岳―
旧東海道―薩垂峠―由比駅
(約六時間三十分)

集合 東海道本線由比駅前・九時
申込 ハガキで三月末日までに

花澤廣巳(東京都世田谷区祖
師谷一―七七八)宛

*申込者には詳細案内を送付します。

◆高橋てる子 山・花の絵展

カラコルム・バルトロ氷河をはじ
め、雄大な大自然と日本の花のある
山岳風景を描きました。油彩・水彩
四十二点展示しています。

日時 三月十五日(月)～二十一日(日)
十時三十分～十九時(最終日
十七時)

会場 横浜・みつい画廊(JR・市営
地下鉄関内駅下車徒歩四分)

ルーム日誌

22日	自然保護委員会 データバン
21日	総務委員会 青年部 図書委 員会
19日	高所登山委員会 土曜会
18日	緑爽会
17日	科学委員会 秩父宮記念山岳 賞運営委員会 学生部 山の 自然学研究會
16日	三水会 青年部 ガンカー・ プンスム偵察報告会
15日	パインスケッチクラブ 百年 史委員会
14日	アルパインスキークラブ
11日	図書委員会 98同期会
10日	アルパインフォトビデオクラ ブ 山の自然学研究會 学生 部 集会委員会
9日	理事会 山げらの会 ジャッ ク93会
8日	二火会 アルパインスケッチ クラブ 95同期会
7日	総務委員会
4日	総務委員会 学生部
3日	常務理事会
2日	総務委員会
1日	総務委員会 会報編集委員会
12月	

ク研究会

24日 アルパインスキークラブ

25日 山研運営委員会

29日

～年末年始閉室

1月5日

12月来室者 610名

■訂正

『山岳』第九三年に誤りがありまし
た。お詫びして訂正します。

・目次「憧れのマッキンリー冬」の
執筆者名は

栗林正寿↓栗秋正寿

・八〇ページ写真真キャプション

ダウラギリI峰・山王山からの生
還↓白き山からの生還

・一九一ページ追悼写真真キャプショ
ンの

那須川浩氏↓名須川浩氏

・二〇四ページ下段及び文中の

那須川浩氏↓名須川浩氏

『山岳』編集委員会

日本山岳会会報 山 645号

1999年(平成11年)2月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 斎藤惇生

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社